福岡市埋蔵文化財調査報告書第1350集

比 恵 82

― 比恵遺跡群第１４３次調査報告 ―

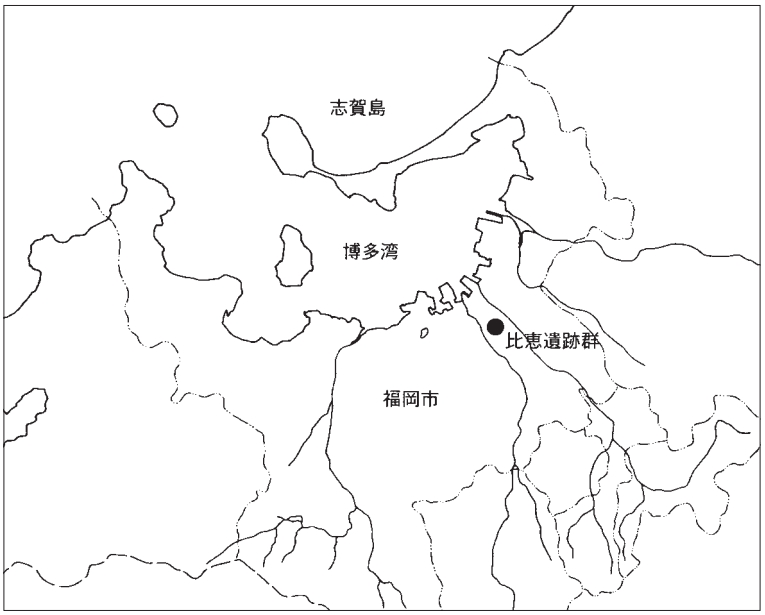
２０１８

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1350集

比 恵 82

― 比恵遺跡群第１４３次調査報告 ―



２０１８

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから玄界灘を介したアジア各地との交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域・社会を形作る礎となったことを示す大切な資料です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、事務所兼倉庫建設に伴う比恵遺跡群第143次調査の報告です。弥生時代の集落跡を発見し、古くから人々がこの地で生活をしていたことを確認できました。また、邪馬台国時代の道路の側溝からは硯と考えられる石製品が出土しました。当時の人々の中に文字を読み書きできる人物がいた可能性を示す貴重な資料です。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました成光産業株式会社様をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成３０年３月２６日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　星子　明夫

例　言

１．本書は博多区博多駅南４丁目地内の事務所兼倉庫建設に伴い、平成28（2016）年７月４日から８月３日に発掘調査した比恵遺跡群第143次調査の報告書である。
２．遺構の実測・写真撮影は朝岡俊也が行った。
３．遺物の実測は、土器の実測を林田憲三が、その他の実測を朝岡が行った。なお、土器の時期・産地決定等に関して久住猛雄氏に、石硯の石材判定に関して九州大学の足立達朗氏に、その他の石器の器種・石材判定に関して九州大学（当時）の森貴教氏にご協力いただいた。
４．遺物の写真撮影は朝岡が行った。
５．製図は山崎賀代子・朝岡・神啓崇が行った。
６．本書に掲載した方位はすべて座標北である。
７．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
８．本書に掲載した標高は都市再生街区基準点10Ｄ03（Ｈ＝6.056m）を基準とした。
９．本書に使用した遺構略号は以下の通り。
　ＳＣ　竪穴建物　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＰ　柱穴
11．本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
12．本書の執筆・編集は朝岡が行った。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	143次	調査略号	ＨＩＥ－143
調査番号	1613	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	020127
事前審査番号	27－2－1063	申請地面積	114.33㎡	調査対象面積	70㎡
調査面積	65㎡	調査地	福岡市博多区博多駅南４丁目120番2		
調査期間	平成28（2016）年7月4日～8月3日				

本文目次

序
Ⅰ．はじめに
１．調査に至る経緯 …… 1
２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境
１．地理的環境 …… 2
２．歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録
１．調査の概要 …… 3
２．溝 …… 5
３．竪穴建物 …… 16
４．土坑 …… 16
５．柱穴 …… 16
６．包含層出土遺物 …… 21
７．その他の遺物 …… 22
８．小結 …… 22

挿図目次

Fig.１ 比恵遺跡群の位置 (1/25000) …… 2
Fig.２ 第143次調査区の位置 (1/600) …… 3
Fig.３ 第143次調査区全体図 (1/50) …… 4
Fig.４ SD03 (1/50) …… 6
Fig.５ SD03 土器群Ａ・Ｂ出土遺物 (1/3) …… 7
Fig.６ SD03 土器群Ｂ出土遺物 (1/3・1/4) …… 8
Fig.７ SD03 土器群Ｃ・Ｄ・Ｅ 出土遺物 (1/3・1/4) …… 9
Fig.８ SD03 土器群Ｆ・Ｇ出土遺物 (1/3・1/4) …… 10
Fig.９ SD03 土器群Ｈ・Ｉ・Ｊ および上層出土遺物 (1/3) …… 11
Fig.10 SD03 中・下層 (土器群Ｂ下・Ｃ下) 出土遺物 (1/3・1/4) …… 12
Fig.11 SD03 中・下層 (土器群Ｆ下) 出土遺物 (1/1・1/3) …… 13
Fig.12 SD03 中・下層出土遺物 (1/3) …… 14
Fig.13 SD03 中・下層 および最下層出土遺物 (1/3) …… 15
Fig.14 調査区北西壁土層 および各種遺構 (1/40・1/50) …… 17
Fig.15 ＳＣ・ＳＫ出土遺物 (1/3) …… 18
Fig.16 ＳＰ出土遺物 (1/1・1/3) …… 19
Fig.17 包含層出土遺物 (1/3) …… 20
Fig.18 包含層およびその他出土遺物 (1/2・1/3・1/4) …… 21

図版目次

ＰＬ.１ （１）Ⅱ区全景（南東より）
（２）Ⅰ区全景（南東より）
（３）Ⅱ区SD03 完掘（南より）
（４）Ⅰ区SD03 完掘（南より）

ＰＬ.２ （１）Ⅲ区全景（南東より）
（２）Ⅱ区北西壁土層
（３）Ⅰ区北西壁土層
（４）Ⅰ区SD03 土器出土状況 (北より)
（５）SD03 土層 (調査区北東壁)

ＰＬ.３ （１）土器群Ｂ・Ｃ①
（２）土器群Ｂ・Ｃ②
（３）土器群Ｄ

ＰＬ.４ （１）土器群Ｅ・Ｆ北側
（２）土器群Ｆ南側・Ｇ
（３）土器群Ｇ44・54

ＰＬ.５ （１）土器群Ｇ45
（２）土器群Ｈ・Ｉ
（３）SC66・67

ＰＬ.６ 石硯

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区博多駅南４丁目120番２における事務所兼倉庫建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年（2016年）３月３日付で受理した（事前審査番号27－2－1063)。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていること、隣接地の発掘調査において現地表下55㎝で遺構が確認されていたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、事務所兼倉庫建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成28年７月１日付で成光産業株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年７月４日から発掘調査を、翌平成29年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査の組織

調査委託：成光産業株式会社
調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査　平成28年度)
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　加藤隆也
調査庶務：文化財部埋蔵文化財課管理係　横田忍
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　大森真衣子
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
発掘作業：井上節子　髙瀬美智子　田中昭子　野内聖司　柗田典子　森田祐子　吉野一憲

（整理・報告　平成29年度)
整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　大塚紀宜
整理・報告庶務：文化財保護課管理調整係　松原加奈枝
整理・報告担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
整理作業：執行恭子　中間千衣子　萩尾朱美

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

比恵遺跡群は福岡市域の東寄りに位置し、南北約1000m、東西約900mに展開する。南東の那珂遺跡群や北東の山王遺跡と合わせて比恵・那珂遺跡群と呼ばれ、二つの二級河川、御笠川・那珂川の間の洪積微高地上で南北２㎞、東西700mに遺跡が展開する。遺構面の標高は４～９mである。阿蘇山の火山灰が２m以上堆積した鳥栖ローム層と呼ばれる黄褐色粘質土が遺構検出面となることが多く、遺構検出時の地山と遺構の境は比較的明瞭だが、乾燥すると土が固くなり、ひび割れを繰り返すと土色がややぼやっとする特徴がある。

２．歴史的環境

比恵・那珂遺跡群は二つの河川に挟まれる。よって、古くから水運や農業の重要地点であり、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を密に検出する複合遺跡である。特に弥生時代中期後半から古墳時代前期には奴国の拠点集落のひとつと考えられる大規模な集落が展開し、『魏志倭人伝』に「(奴国には)二万戸（あり)」と記された様相を反映する。比恵遺跡群東側には弥生時代後期から古墳時代前期までの首長居館の区画と考えられる大規模な方形区画溝があり、また那珂遺跡群には九州最古の前方後円墳ともされる那珂八幡古墳が築造され、三角縁神獣鏡等が出土した。古墳時代後期から飛鳥時代には比恵遺跡群で３本柱を一組とする柱穴列に囲まれた倉庫群が検出され、大宰府の前身である「那津官家」に関連する施設と考えられている。

Fig.1　比恵遺跡群の位置（1/25000）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

第143次調査区は比恵遺跡群の中央西寄りに位置する。本調査区の調査面積は65㎡で、これを北東側のⅠ区、南西側のⅡ区、南東側のⅢ区に分け、調査した。周囲の調査の状況から、遺跡が残存することが確実であったため、事前の確認調査は行っていない。重機掘削により地表下約20㎝で包含層とそれを切る溝状の遺構を検出し、以下を人力で掘削した。最終的に地山である黄褐色粘質土（鳥栖ローム層）に達したのは地表下約60㎝である。遺構面の標高は約6.1mである。

本調査では狭い面積にも関わらず、パンケース30箱分の非常に多量の遺物が出土した。検出した遺構は弥生時代中期の円形竪穴建物１軒・方形竪穴建物２軒以上・土坑２基・柱穴、及び弥生時代終末期～古墳時代前期の道路側溝である。ただし、貼床・壁溝の痕跡や土層観察、また遺物量から、包含層とみなしたものは最大で６軒ほどの方形竪穴建物の集合体である可能性もある。道路側溝は隣接する127次調査で西側の側溝を検出しており、並行する溝の間の約６mが道路幅となる。側溝からはかなり密に土器が出土し、その中から古墳時代前期の石硯と考えられる石製品が出土した。なお、土層観察から包含層を切り、地山まで達しない遺構が多数存在したことは明らかだが、平面での検出はできず、包含層とともに掘り下げた。

Fig.２　第143次調査区の位置（1/600）

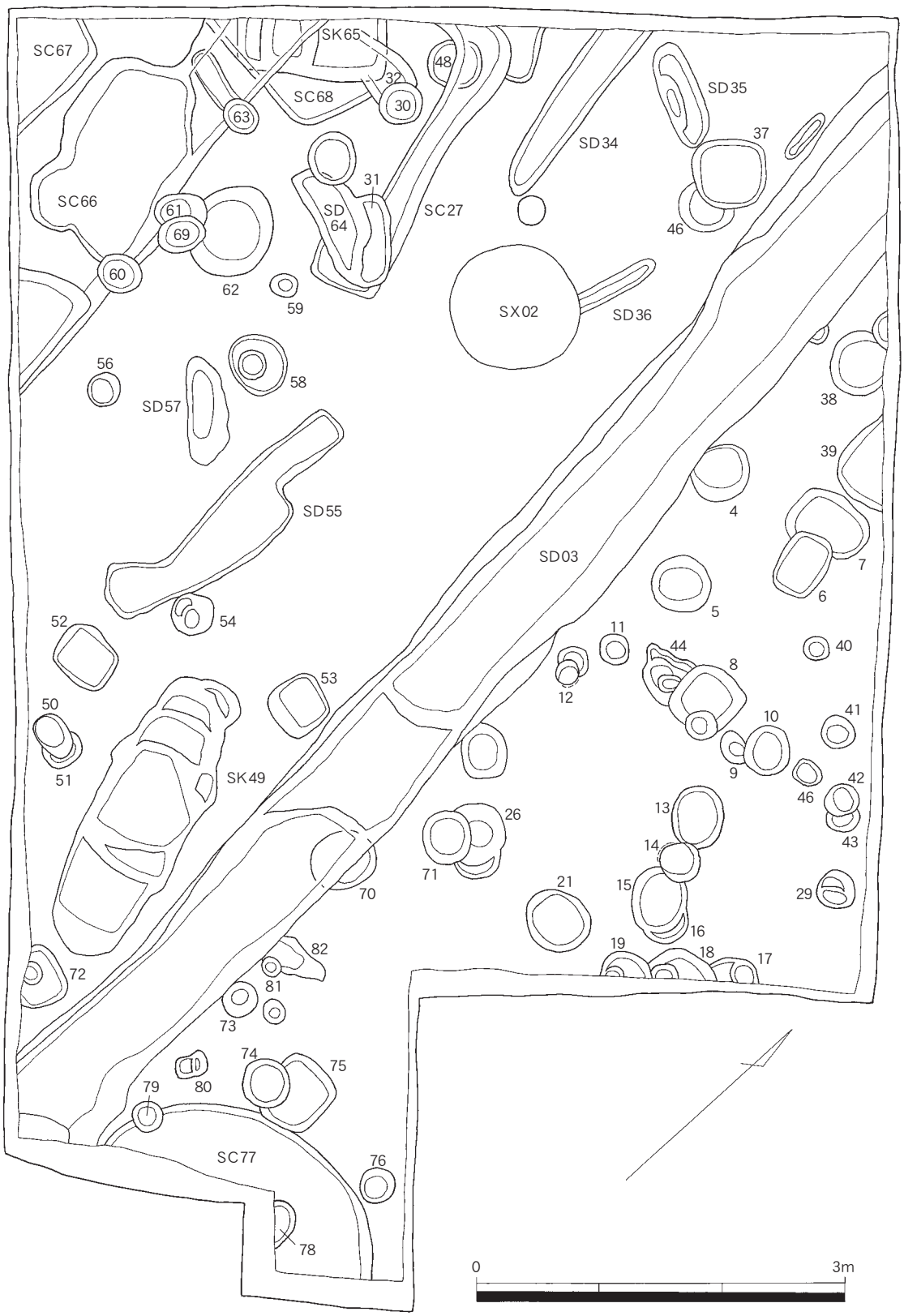


Fig.3　第143次調査区全体図（1/50）

２．溝

ＳＤ０３（Fig.４～13　PL.１～６）

調査区北隅から南隅まで正方位に近い方向で伸びる溝で、道路の側溝と考えられる。隣接する127次調査で西側の側溝を検出しており、並行する溝の間の約６mが道路幅となる。包含層上面での遺構検出時、帯状に遺物が密な部分が認められ、存在が明らかになった。検出した長さは約10.6m、幅約0.9m、深さは0.3～0.7mで、包含層を切る。南側が北側よりやや浅く、南側が高くなる当時の地形を反映していると考えられる。土層から、幾度もの掘り直しが観察できる。遺物は地山の鳥栖ローム層上面の高さよりも上位で最も密に出土し、下層ではあまり出土しなかった。古墳時代前期の土器を主体とするが、弥生時代中期後半の土器等も混じる。上層では遺物を残しながら比較的丁寧に掘削できたため、いくつかの帯状の土器のまとまりを認めることができた。この「土器群」は、ひとつひとつが一回の部分的な溝の掘り直しを示すまとまりと考えられ、混入も多いだろうが「一括資料」に準じるものと捉えられる。記録は各土器群の範囲を記録し、特徴的な遺物に関しては出土状況写真に遺物番号を付けて、取り上げた。本来は中層以下についても同様に「土器群の把握」と「遺物の出土位置の記録」を行わなければならないが、時間の制約から中層以下はスコップでのどか掘りに近い形になってしまった。よって、中・下層出土土器の中で「土器群●下」出土としたものは、あくまでその土器群の下位から出土したものであって、その土器群に含まれるものではないし、「土器群●下」出土の遺物同士の共伴も不明確である。

上層出土遺物

１～３は土器群Ａ出土。１が壺。頸部内面の接合痕が顕著。２・３が甕。

４～27は土器群Ｂ出土。４～10が壺。４・５は頸部内面の接合痕が顕著。６は胎土に２㎜以下の砂粒を含むが、比較的精良。９は外面に線刻があり、内面は比較的雑な強いナデを施す。10は頸部に刺突と沈線による文様を施す。11・12は底部。11は外面にタタキの痕跡が残る。12は内面に簾状ハケがみられる。13は小型器台。14～19は高坏。14・16は２方向に、15は４方向に穿孔がある。18は簾状ハケがみられる。20～27は甕。21は沈線による波状文がみられる。22は１ヵ所に竹管文らしきものがある。27は大型で、頸部突帯の刻み目の一部が竹管文になる。口縁外面はきれいに横ナデし、ハケ目をあまり残さない。

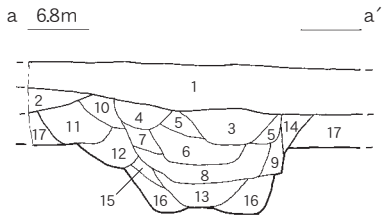
28～32は土器群Ｃ出土。28・29が壺。28は山陰系。29は外面にミガキに近い横方向の強く丁寧な板ナデが施される。30は甕。31は高坏。32は台石で、玄武岩製。

33～36は土器群Ｄ出土。33・34は壺で胎土や焼成などから同一個体か。35は鉢。36は高坏で、脚部の穿孔は２方向か。

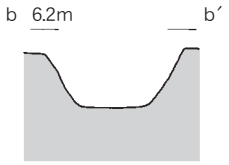
37～40は土器群Ｅ出土。土器群Ｆ下の破片と接合するものがあり、土器群Ｆ下の遺物の一部は土器群Ｅと同じまとまりになる可能性がある。37・38は高坏。38は土器群Ｆ下出土の破片と接合し、脚部に２方向の穿孔がある。脚部にタタキの痕跡がみられる。39・40は小型器台で、脚部の穿孔は39が４方向、40が２方向。

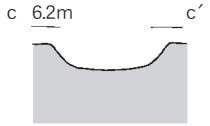
41～43は土器群Ｆ出土。41・42は壺。42は頸部の薄い突帯に刻み目を施し、その下に沈線でジグザグ模様を施す。東部瀬戸内系か。43は甕。

44～54は土器群Ｇ出土。44・45・54はやや下層から出土した。44・45は壺。44の胴部の穴は意図的な穿孔か。45は大型で、頸部の突帯に刻み目を施す。46～50は甕。48・49・50は幅狭のタタキ痕が顕著にみられる。51は鉢。52は製塩土器か。53は小型器台で、簾状ハケがみられる。54は高坏で44の真横から出土した。



1．表土。礫混じる。
2．耕作土。茶褐土＋黄褐ブロック。
3．暗褐土。土器多い。3～6層が土器群Ｂに相当か。
4．茶褐土。土器多い。
5．茶褐土。
6．暗茶褐土。土器多い。
7．茶褐土。
8．暗茶褐土。土器やや多い。土器群Ｂ下に相当か。
9．茶褐土。
10．茶褐土。
11．茶褐土＋黄褐土粒。土器やや多い。土器群Ａに相当か。
12．茶褐土。
13．暗褐土。粘性やや強い。
14．暗茶褐土。
15．暗茶褐土。
16．黒褐土＋黄褐土粒。土器ほとんどなし。
17．暗褐土。包含層。





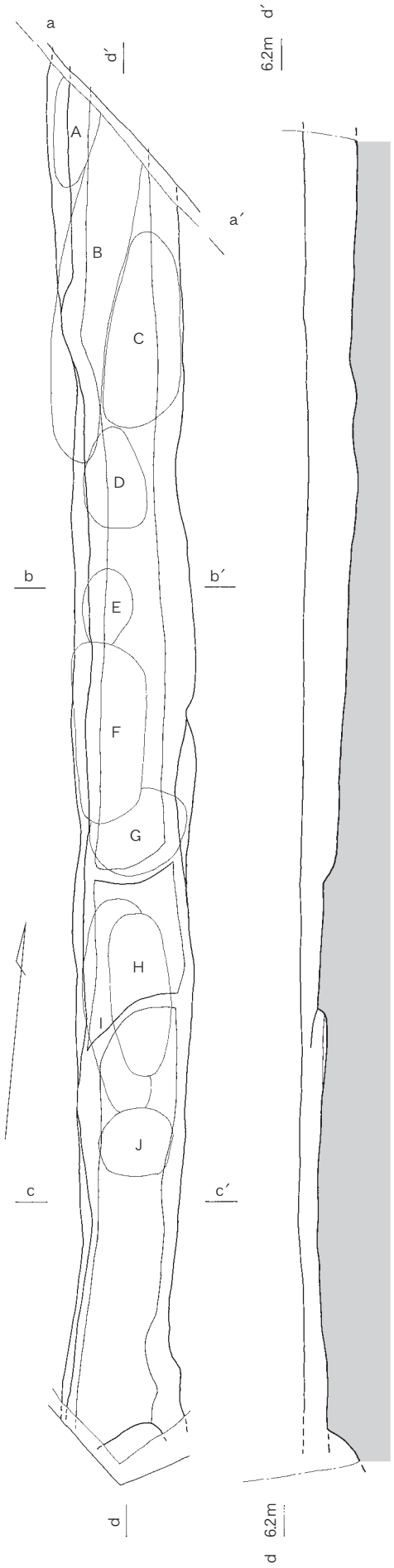


Fig.4　SD03（1/50）

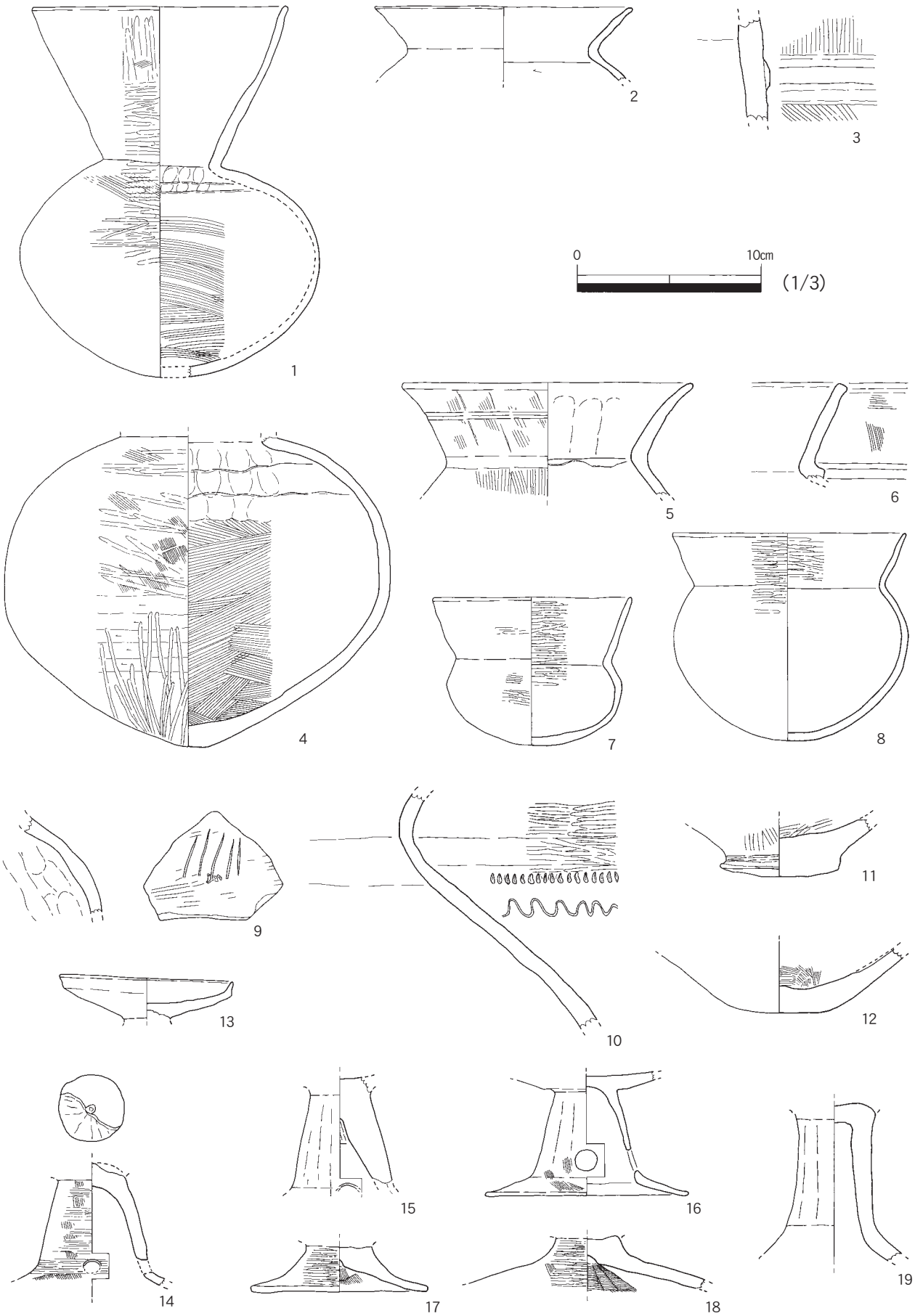


Fig.5　SD03 土器群Ａ・Ｂ出土遺物（1/3）

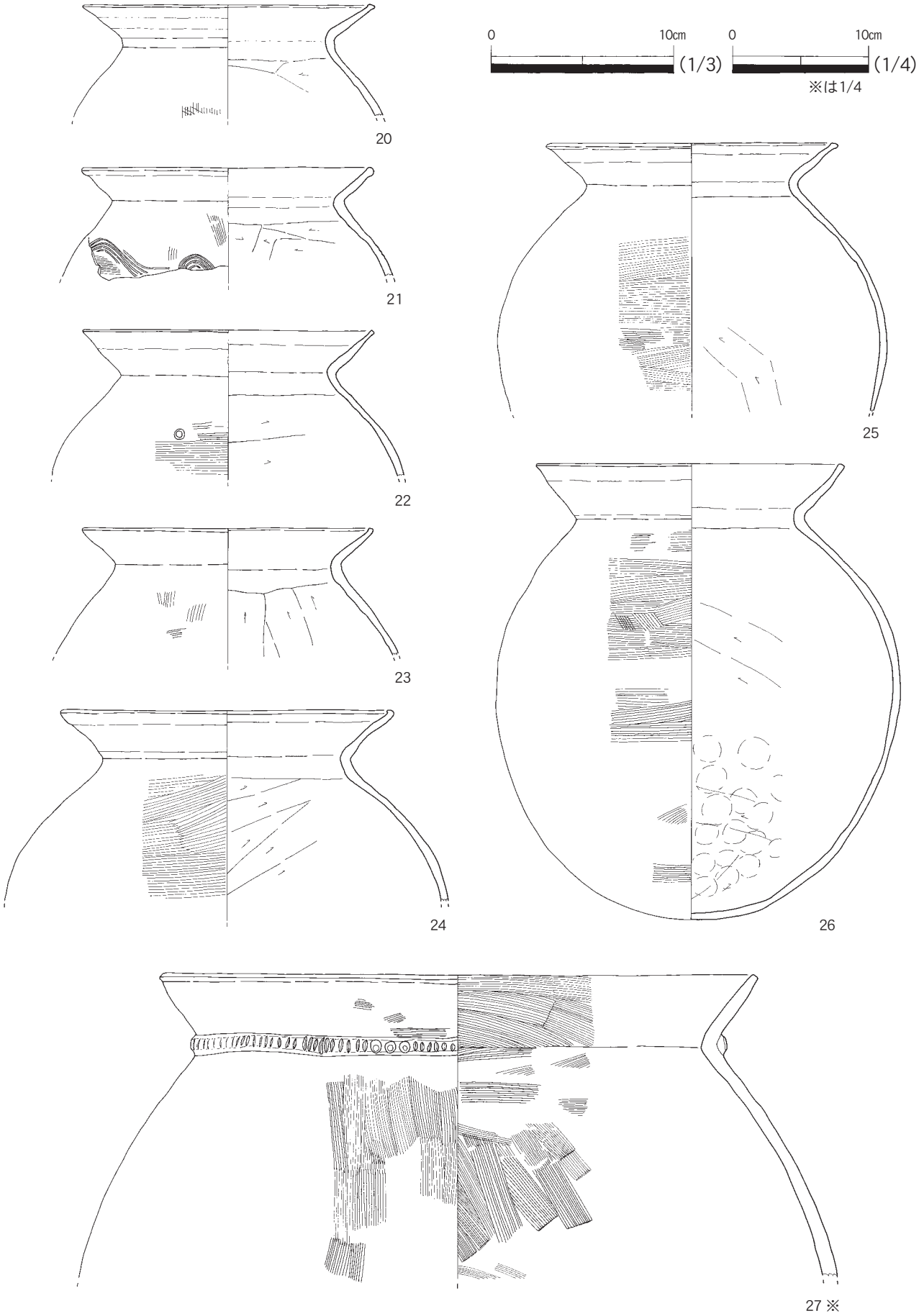


Fig.6　SD03 土器群Ｂ出土遺物（1/3・1/4）

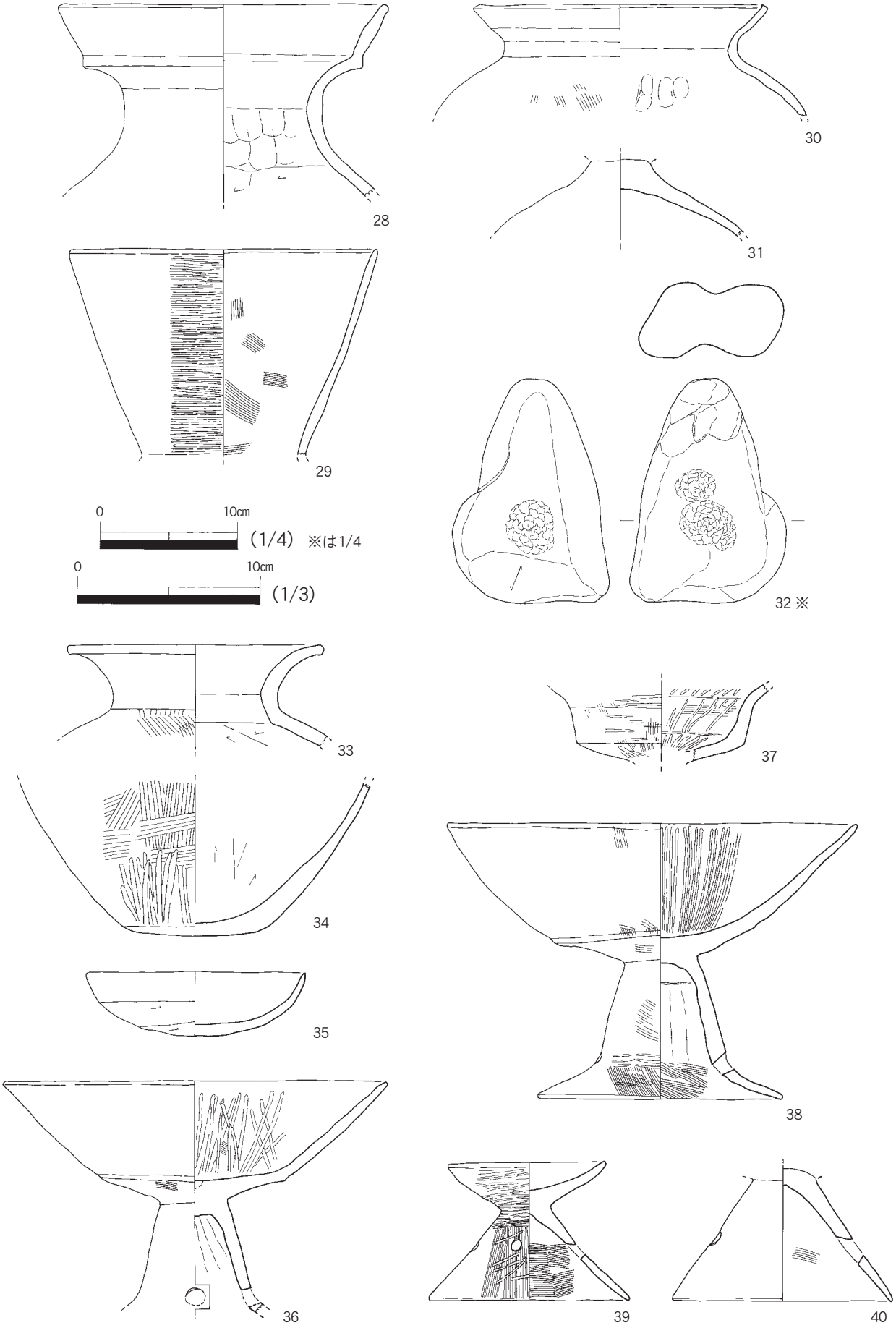


Fig.7　SD03 土器群C・D・E出土遺物（1/3・1/4）

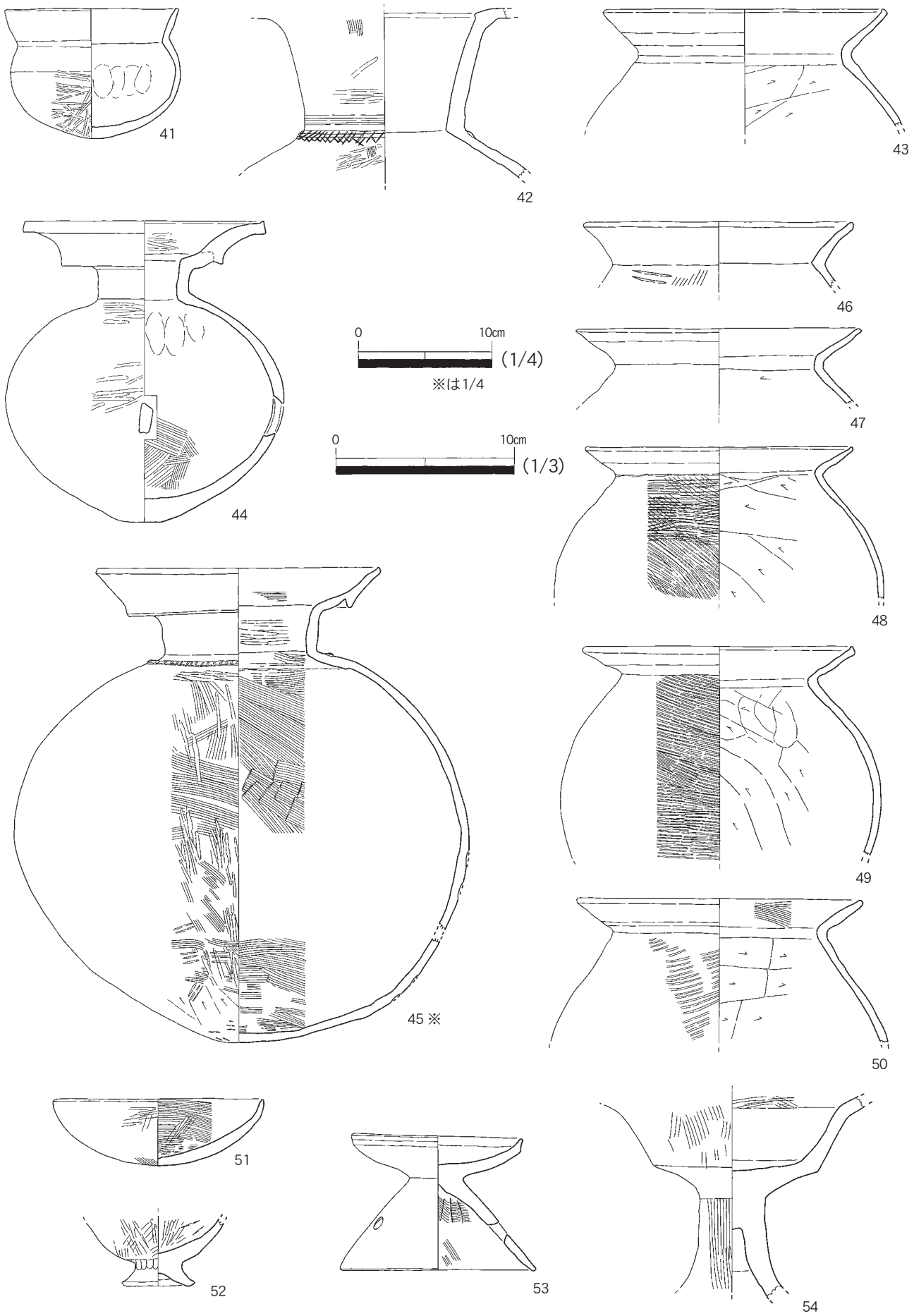


Fig.8　SD03 土器群Ｆ・Ｇ出土遺物（1/3・1/4）

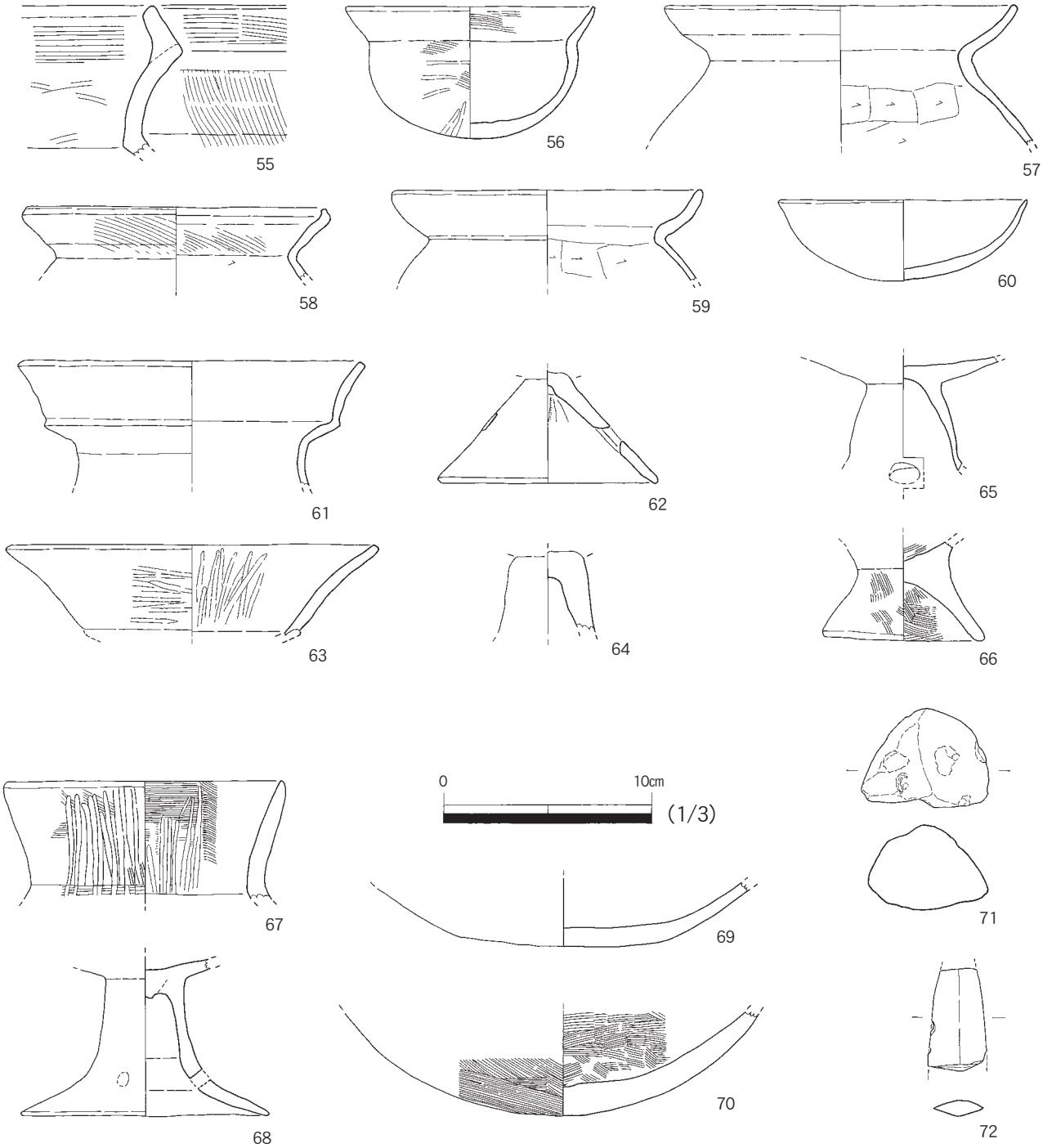


Fig.9　SD03 土器群Ｈ・Ｉ・Ｊおよび上層出土遺物（1/3）

55～60が土器群H出土。55・56が壺。57～59が甕。60が鉢。

61～64が土器群Ｉ出土。61が壺で、山陰系。62が小型器台で、簾状ハケがみられる。穿孔は２方向か。63・64は高坏。

65・66が土器群Ｊ出土。65は高坏で、脚部穿孔の方向数は不明。66は台付き鉢か。

67～72はＳＤ03上層出土だが、土器群に属さない。67は壺。68は高坏で、脚部穿孔は３方向か。69・70は底部。71は軽石。72は磨製石剣で、菫青石ホルンフェルス製。

中・下層出土遺物

73～76は土器群Ｂ下出土。73・74は壺。75は甕。76は石包丁で、剥離が激しいため不明確だが未製品か。頁岩製。

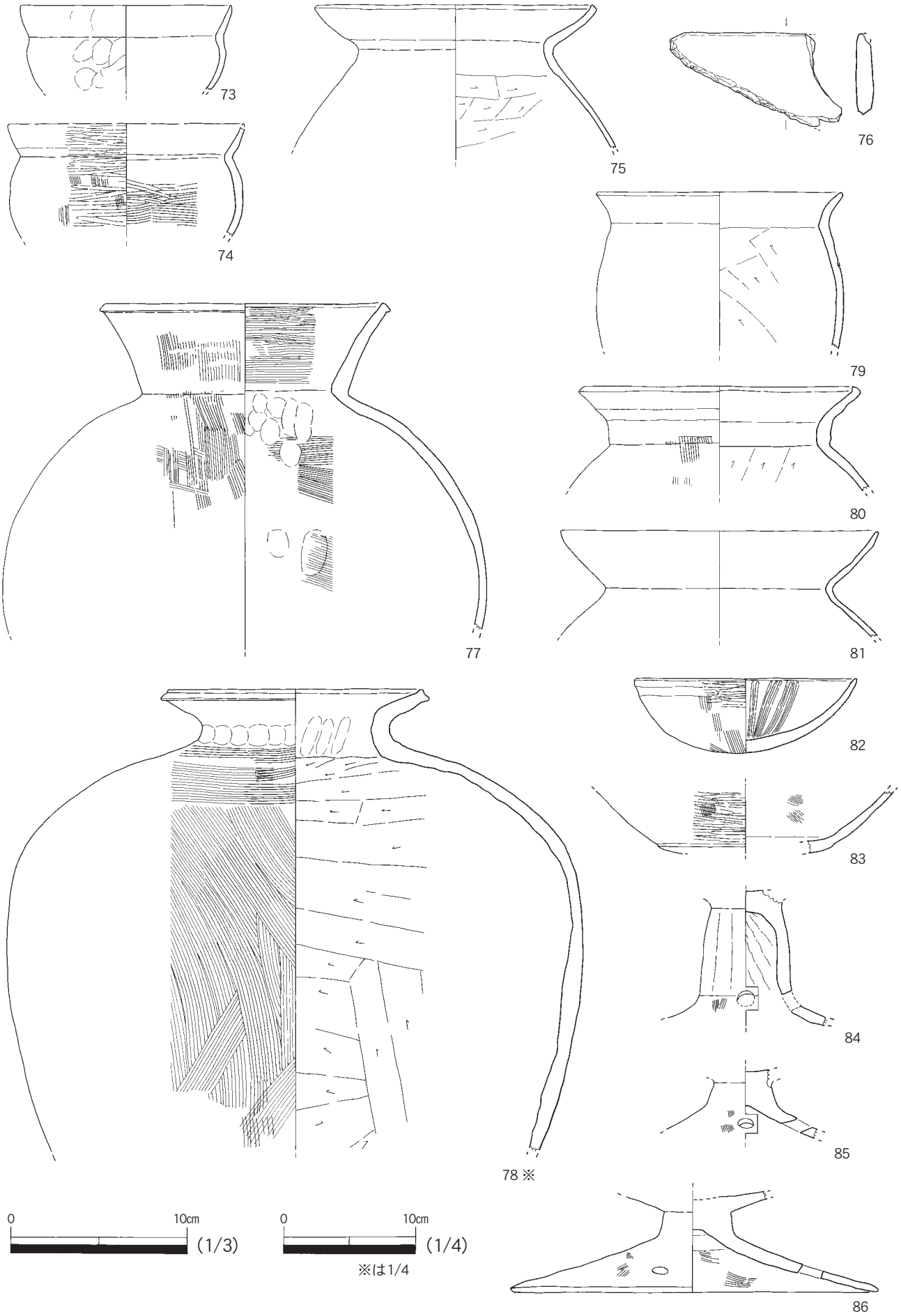


Fig.10　SD03 中・下層（土器群Ｂ下・Ｃ下）出土遺物（1/3・1/4）

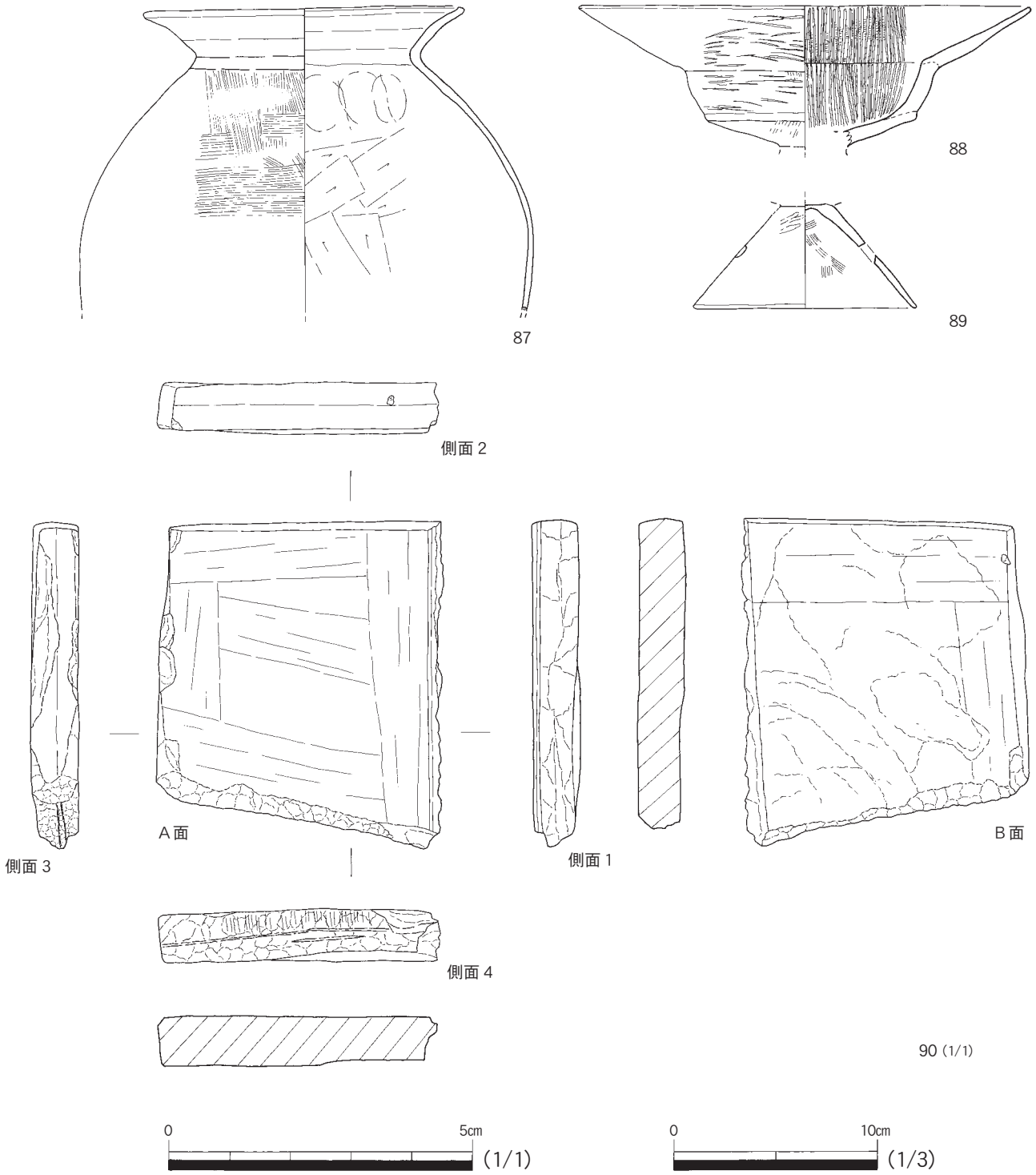


Fig.11　SD03 中・下層（土器群Ｆ下）出土遺物（1/1・1/3）

77～86は土器群Ｃ下出土。77・78は壺。78は大型で、土器群Ｃ・Ｉ・Ｊ・Ｂ下などの破片が接合した。Ｃ下出土の破片が最も大きい。山陰系の技法で作られている。79～81が甕。82が鉢。83～86が高坏。脚部穿孔は84・85が２方向で、86が３方向。

87～90は土器群Ｆ下出土。87は甕で、断面の内側が黒いサンドイッチ状の焼成。88は高坏。89は小型器台で、穿孔は２方向。90は長さ5.3㎝、幅4.7㎝、最大厚0.8㎝の板状の石製品で、石硯と考えられる。石材は暗灰褐色の砂質頁岩で、微細な白雲母を多量に含む。Ａ面はわずかにゆがみがあるが平滑に研磨される。縁に沿って並行方向に幅１㎝ほどの研磨痕が観察され、図化したように側面１側の研磨が最も

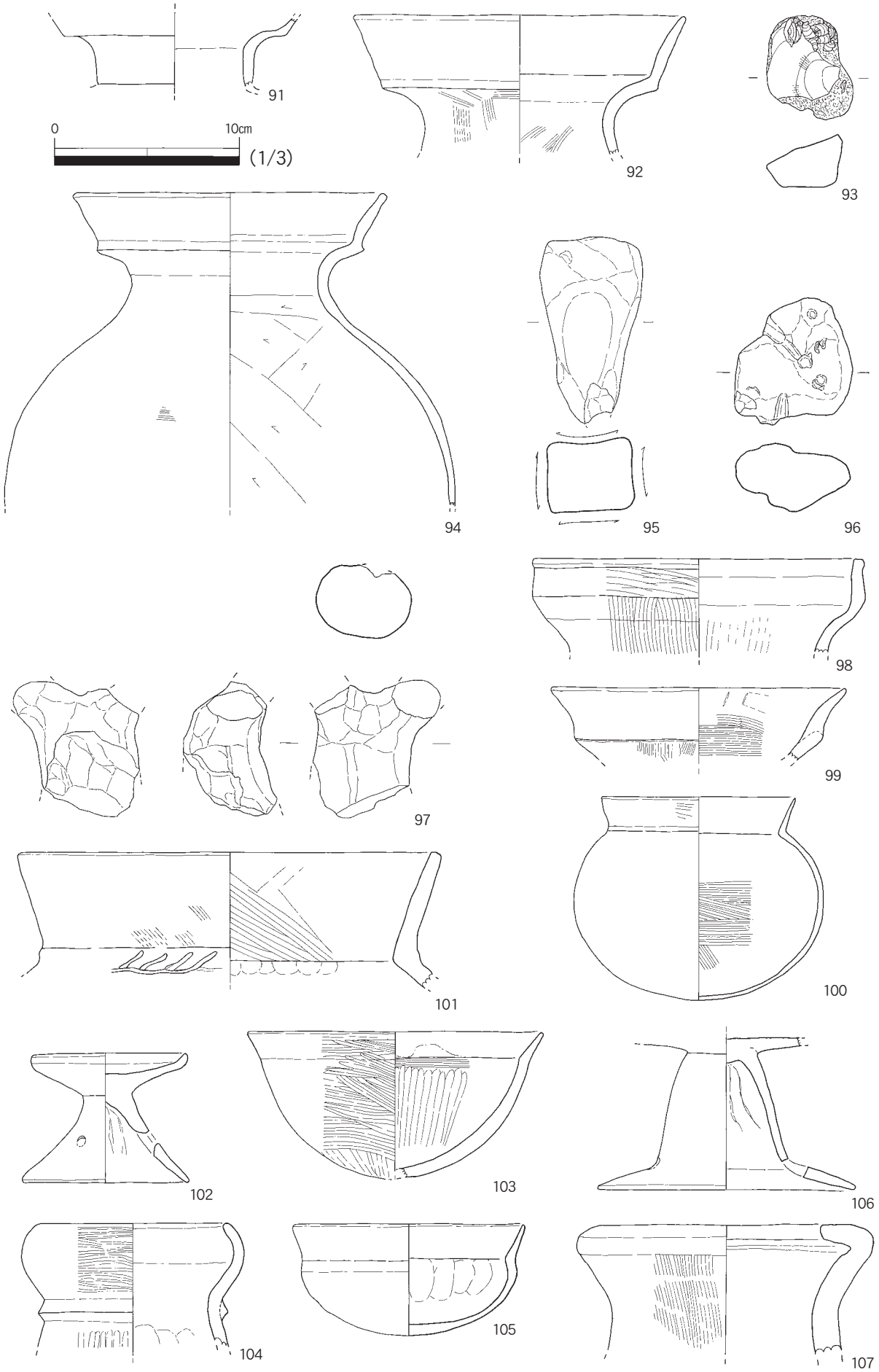


Fig.12　SD03 中・下層出土遺物（1/3）

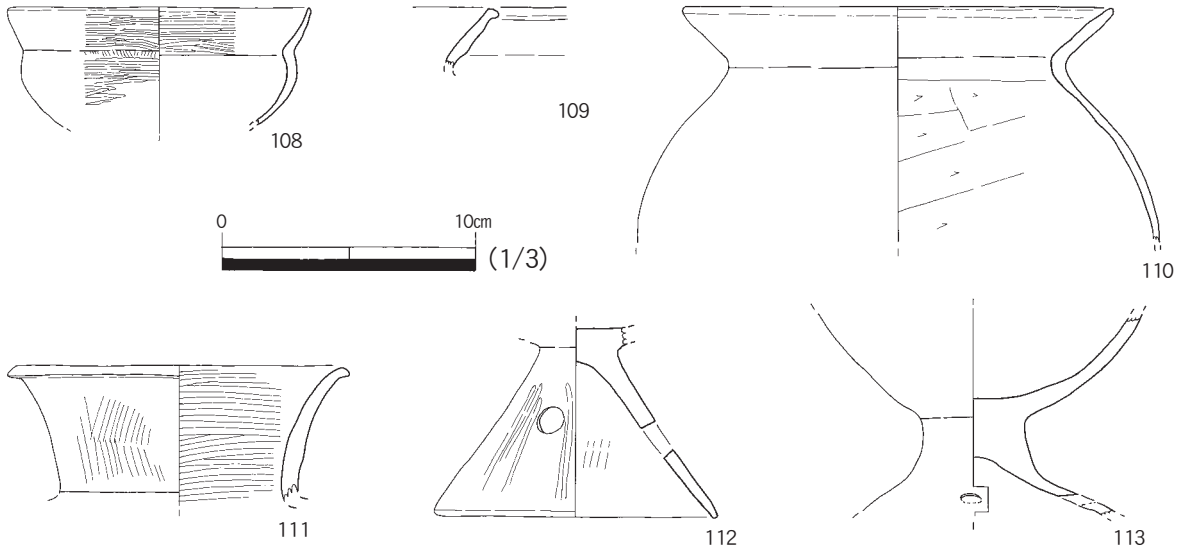


Fig.13　SD03 中・下層および最下層出土遺物（1/3）

新しい。また中央部横方向にごく浅い溝状の研磨痕がある。B面も平滑に研磨されるが、石材の割面がきれいに消されておらず、やや凹凸がある。A面のように縁に沿った研磨がみられる。また、図の左下側 1/4 程に円を４分割したようなわずかな窪みがある。側面１は割れ口が完全に残る。A面側に浅い溝状の痕跡が残り、擦り切り技法によって割られたと考えられる。側面２は完全に研磨される。中央付近にわずかに稜がつくが、おおよそA面に直交する。中央付近に筋を境にA面側とB面側で色が少し異なるが、これは側面３に続いており、擦り切りの痕跡ではなく、石の目だろう。側面３も研磨されるが、石材の割れ面が完全に消えていない。A面と直交せず、わずかに斜めになる。側面４は全面に敲打痕がみられる。中央付近に溝状の筋が２～３条あり、擦り切りの痕跡の可能性がある。またA面側に上下の筋も多数みられる。側面１の割れと側面４の敲打の新旧関係は明確でないが、側面１の割れ面を敲打した痕跡はみとめられない。また、側面３の研磨と、側面４の敲打の新旧関係も明確ではないが、側面３でA面側・B面側の縁に敲打痕が残る点を考慮すれば、側面３の研磨の方が新しい可能性もある。赤外線カメラによる観察で、墨などの痕跡は認められなかった。

91～93はⅠ区北側出土。91・92は壺。91は胎土が水こしされ、精良。92は山陰系。93は黒曜石で、図化した面の裏面は全て自然面が残る。

94～96はⅠ区南側出土。94は壺で、山陰系。95は砥石で、砂岩製。96は軽石で、所々に幅５㎜程の紐で縛ったような痕跡がある。浮子か。

97はⅡ区北側出土。犬型支脚。

98～103はⅡ区南側出土。98～100は壺。101は甕。頸部に刻み目を施し、胎土に赤色土粒を多く含む。102は小型器台。脚部穿孔は３方向。103は鉢。

104～107はⅢ区出土。104・105は壺。106は高坏で、脚部穿孔は２方向。107は器台。

108～110は中・下層出土だが、地点が不明。108が壺。109・110が甕。

最下層出土遺物

111・112はⅠ区北側出土。111が壺で、やや白色を帯びる。播磨系の可能性がある。112が小型器台で、脚部穿孔は３方向。ヨコミガキが顕著でなく、縦方向の調整がみられる。113はⅠ区南側出土で、高坏。脚部穿孔は２方向もしくは４方向か。

３．竪穴建物

明確な竪穴建物は少ないが、貼床・壁溝の痕跡や土層観察、また遺物量から、包含層とみなしたものが最大で６軒ほどの方形竪穴建物の集合体である可能性もある。包含層は弥生時代中期の遺物と古墳時代前期の遺物が混じるが、後者は包含層上から掘り込まれた遺構に属するものだろう。包含層状を呈する竪穴建物の時期は弥生時代中期後半を主体とするとみられ、土層から東側の建物を西側の建物が切る傾向が観察できるが、明確ではない。

ＳＣ２７（Fig.15）

調査区北西側で検出した浅い溝で、方形竪穴建物の壁溝の痕跡と考えられる。

114は甕。115は支脚。

ＳＣ６６（Fig.14・15　PL.５）

調査区西側で検出した。方形竪穴建物と考えられる。幅3.9m以上、奥行き1.8m以上、深さ0.2m。床面の凹凸は貼床を認識できず、掘方まで掘ってしまったためか。南側の方形の掘り込みは屋内土坑などの可能性がある。SC67と合わせて掘ってしまい、遺物が混ざっている。

116・117は甕。118は底部。119は高坏。

ＳＣ６７（Fig.14・15　PL.５）

SC66を切る方形の掘り込みで、竪穴建物と考える。切り合い関係は明確であった。

ＳＣ７７（Fig.14・15）

調査区南側で検出した。少し小さいが、径2.5m程の円形竪穴建物と考えられる。深さは0.5m。

４．土坑

ＳＫ４９（Fig.14・15）

調査区南西側で検出した。長さ2.5m、幅0.9mで、底は両側から段々になり、最大の深さは0.25mである。

120は壺。121～124は甕。125は鉢か。126は高坏。127は側面（２面）のみが平らで研磨されており、砥石の未製品か。砂岩製。部分的に被熱による赤変がみられる。

ＳＫ６５（Fig.15）

調査区北西側で検出し、調査区壁にかかる。北壁土層18～21層にあたり、中ほどに段がみられる。幅1.5m、深さ0.4mで、柱穴の可能性もあろう。

128・129は甕。

５．柱穴（Fig.16）

円形のものと隅丸方形のものがある。遺物をみると弥生時代中期のものが多い。路面との関係かSD03以西は比較的希薄になる。

130はＳＰ08出土で、甕。131はＳＰ13出土で、壺。丹塗り。132～134はＳＰ21出土。132は瓢形土器。丹塗り。133は高坏。134は砥石で、花崗岩製。135はＳＰ29出土の高坏。136・137はＳＰ37出土で、136は甕、137は甕棺。138はＳＰ38出土の甕。139はＳＰ46出土の壺で、丹塗りされる。140・141はＳＰ52出土。140は砥石で、砂岩製。被熱あり。141は底面出土の碧玉製管玉。きれいな円筒形で、淡く褐色味のある緑色を呈すことから北陸産の可能性が高い。穿孔内部の痕跡から、石針によって穿孔された可能性が高い。142・143はＳＰ53出土。142は甕。143は甕棺か。144・145はＳＰ75出土の甕。146はＳＰ79出土の軽石。

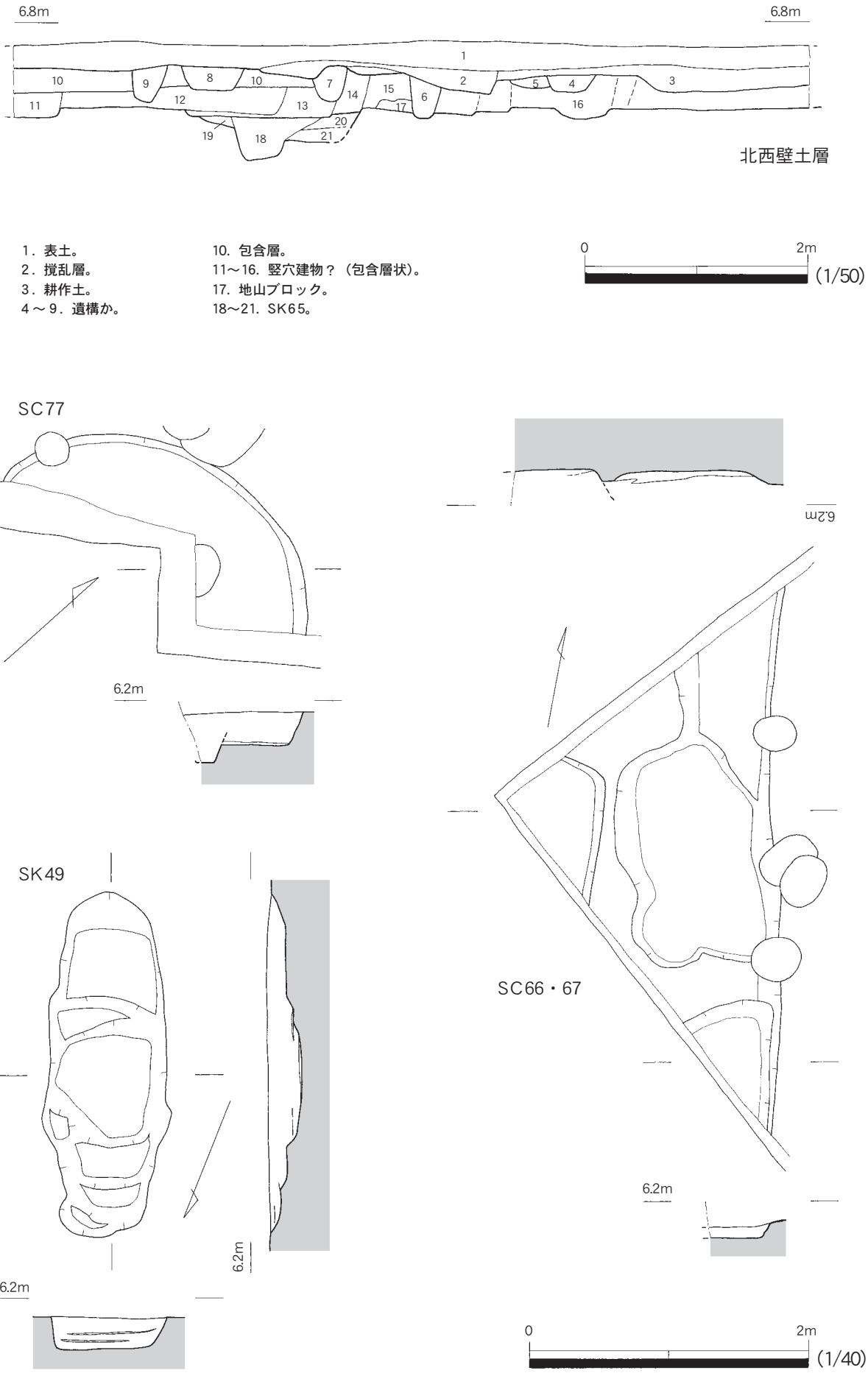


Fig.14　調査区北西壁土層および各種遺構（1/40・1/50）

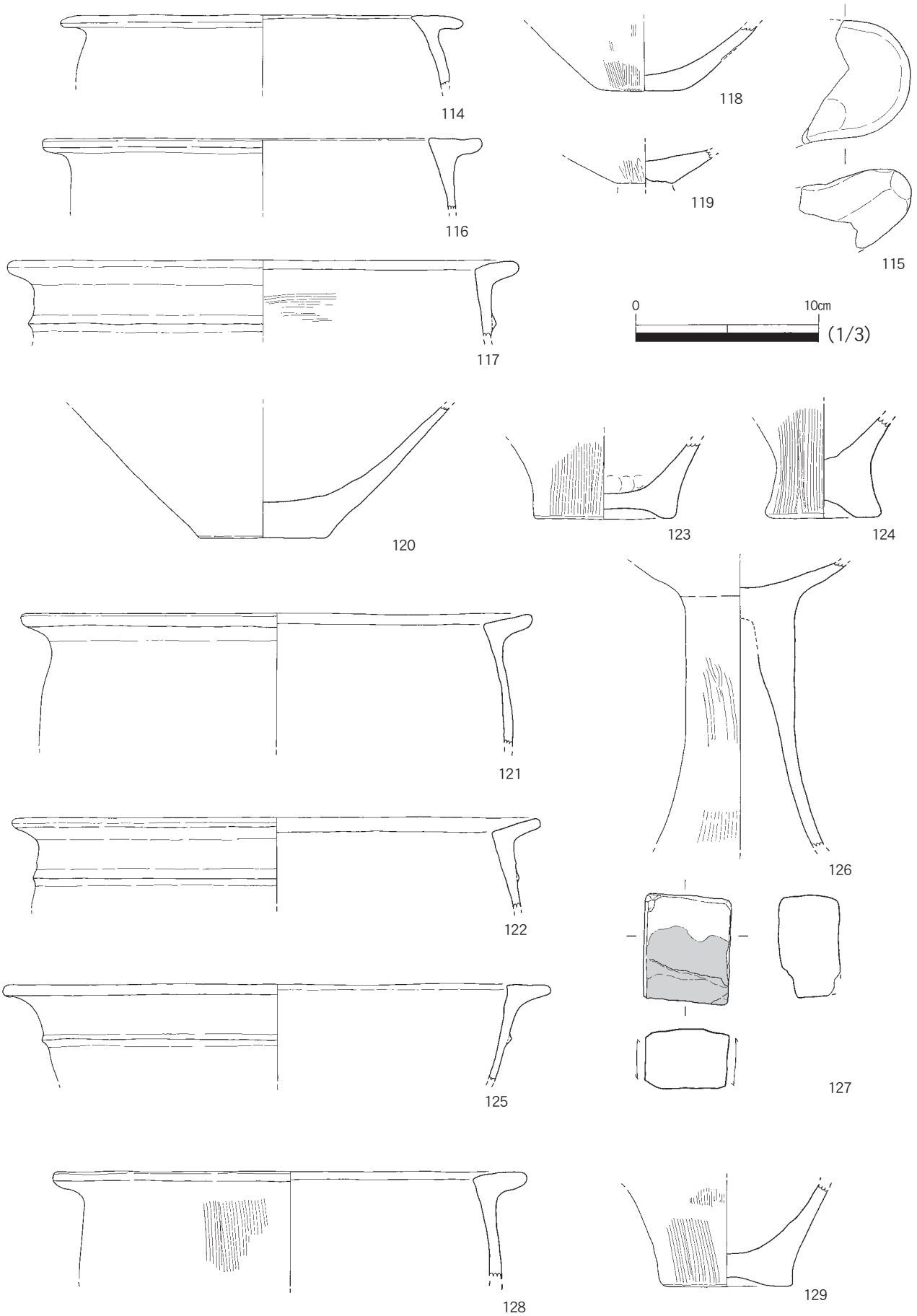


Fig.15　ＳＣ・ＳＫ出土遺物（1/3）

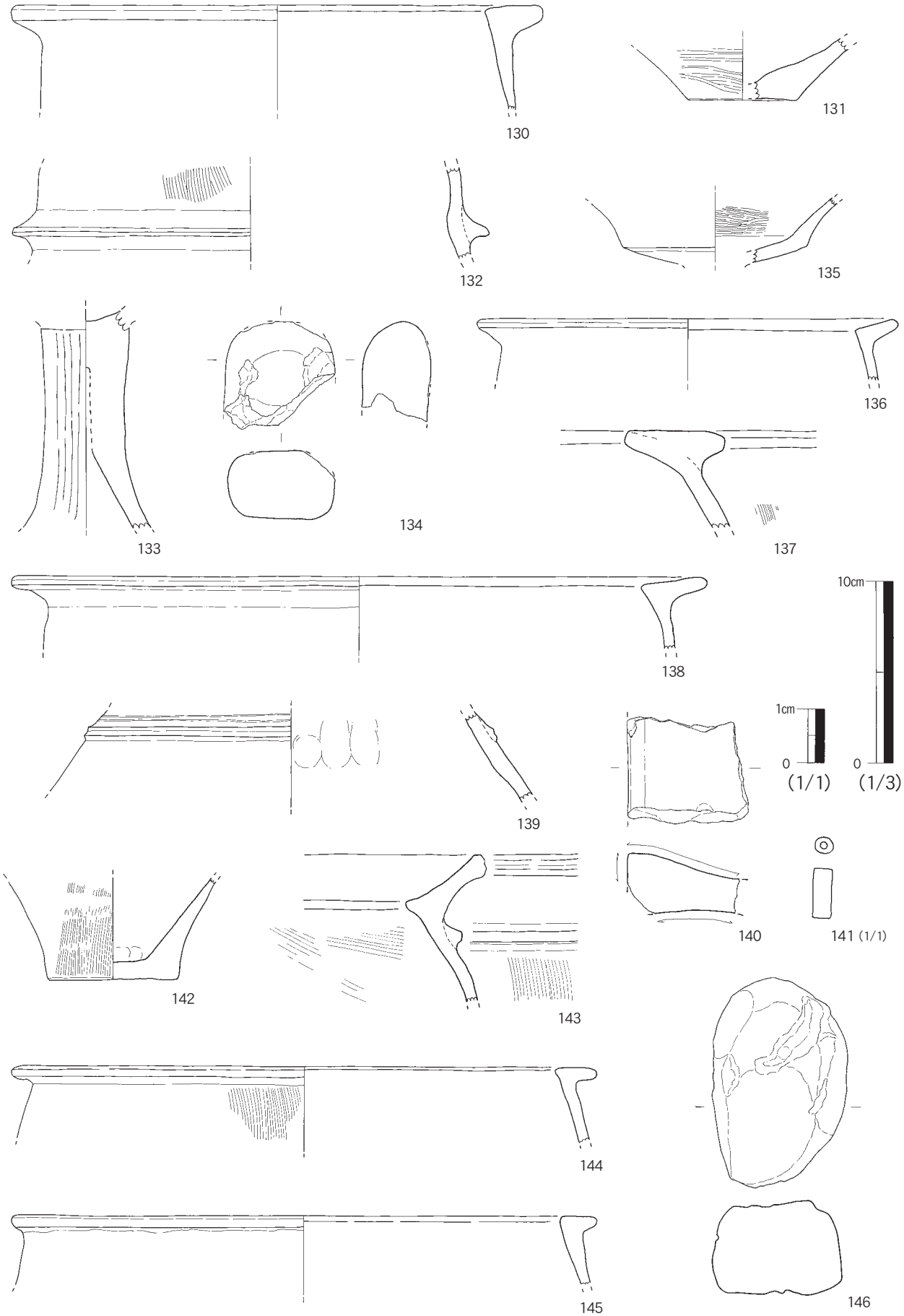


Fig.16　ＳＰ出土遺物（1/1・1/3）

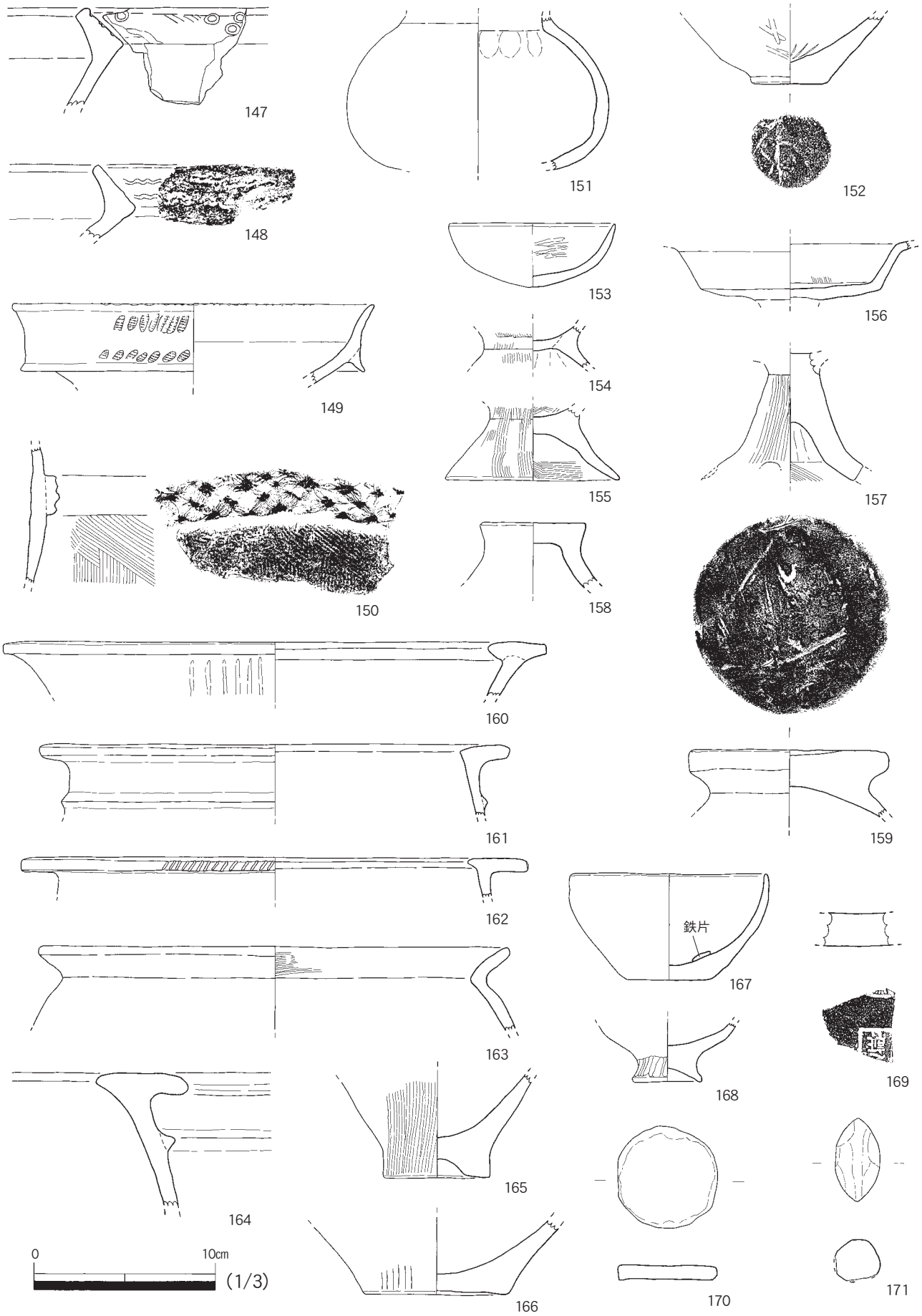


Fig.17　包含層出土遺物（1/3）

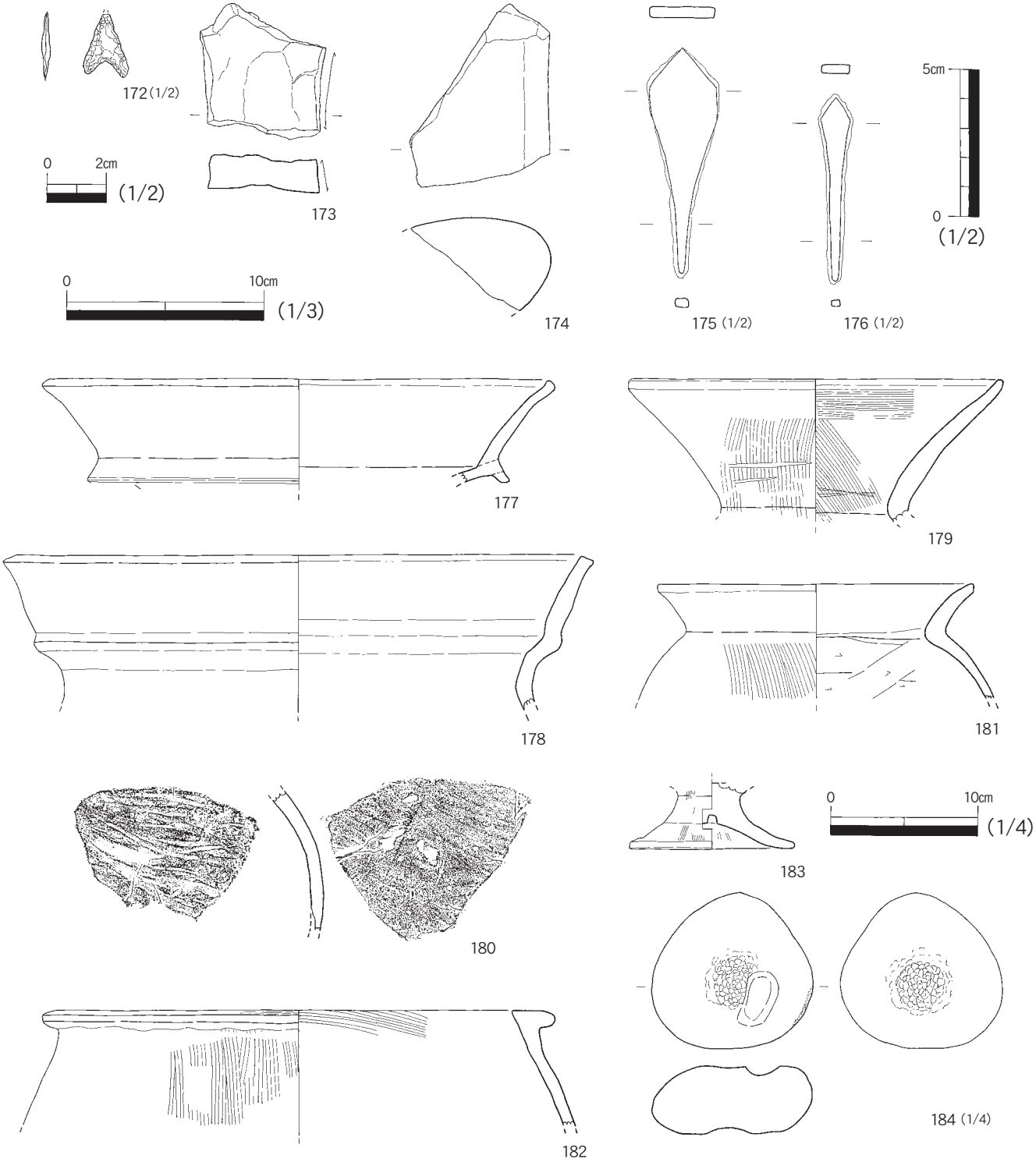


Fig.18　包含層およびその他出土遺物（1/2・1/3・1/4）

6．包含層出土遺物（Fig17・18）

147～152は壺。147は口縁部に三つ一組（？）の竹管文を施す。148は口縁部に二条の沈線による波状文を二段施す。149はハケ目工具による圧痕が連続的にみられる。150は突帯に連続する×印の文様がつく。152は簾状ハケがみられる。153は鉢。154・155は台付き鉢か。156・157は高坏。157の脚部穿孔は４方向か。158・159は蓋か。160は壺。161～166は甕。164は甕棺か。167は鉢。168は製塩土器か。169は瓦で、「～之証」と刻印される。170は土製の円盤で、土器の底部を打ち欠き、研磨したものか。171は土製投弾。172は石鏃で安山岩製。173は砥石。砂岩製で、微細な白雲母を多量

に含み、石硯の石材に近い印象を受ける。174は磨り石か。片岩製。175・176は鉄鏃。176はヤスの可能性もある。

７．その他の遺物（Fig.18）

表土や廃土、攪乱などから出土した遺物である。

177～180は壺。178は山陰系。179は頸部付近の外内面に横方向の沈線状の痕跡がある。180は外面をミガくが、タタキの痕跡が残る。線刻あり。内面はヘラ状工具による比較的雑な強いナデを施す。181は甕。182も甕。183は高坏。184は敲き石で、砂岩製。親指がすっぽりはまる窪みを作っている。

８．小結

狭い面積であったが、本調査区では道路側溝と考えられるＳＤ03と包含層を中心に多量の遺物が出土した。包含層は竪穴建物の集合体である可能性があるが、そうでなかったにしても、当地で非常に密に生活が営まれていたことは間違いないと言える。

ＳＤ03で出土した石硯に関してまとめておきたい。

まず、時期について、ＳＤ03からは弥生時代中期の遺物と弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物が出土した。ＳＤ03は弥生時代終末期に掘削されて、以後何度も掘り直されていると考えられており、弥生時代中期の遺物は側溝が埋まる際に周辺の竪穴建物から紛れ込んだものであろう。側溝に切られる包含層も非常に密に遺物を含んでおり、そこから多くの遺物が紛れ込むことは自然である。古墳時代中期以降の遺物は破片の紛れ込みさえも見当たらないため、石硯が廃棄された時期として可能性があるのは弥生時代中期（住居埋土に含まれたものが紛れ込んだ可能性)、弥生時代終末期、古墳時代前期のいずれかであることは間違いない。ただし、弥生時代中期の土器は主体的でなく、また終末期の土器も最下層出土の土器などが該当する（久住編年ＩＢ期）が少ない。よって、石硯は古墳時代前期に埋まった可能性が高い。

中層以下で出土した遺物については、調査の時間的制約から出土位置の記録を行うことができなかったため、共伴関係は明確でないが、石硯が出土した付近から出土した土器は「土器群Ｆ下」出土の土器である。前述のようにこれは「土器群Ｆの中の下層」を示すわけではなく、あくまで上層で土器群Ｆが出土した地点の中・下層から出土したことを示すものである。ただし、38の高坏は土器群Ｅ出土の破片と土器群Ｆ下出土の破片が接合しており、土器群Ｆ下出土の遺物の中には土器群Ｅと同じまとまりに含まれるものがあるかもしれない。これらの土器の時期は、久住猛雄氏の編年でⅡＢ期（古相）にあたり、この前後に石硯が埋められた可能性が高いと言えよう。

石硯が埋められた脈絡については、①いらなくなって廃棄された、②祭祀の中で埋められた、③たまたま落としてしまったという３つの可能性がある。③の可能性は薄いとして、バラバラの土器片が多く入った中から出土したならば①の可能性が高いし、完形の土器の横から出土したならば②の可能性が高くなる。ＳＤ03は、上層ではバラバラの土器片が多く廃棄された様相であったが、中下層には完形の土器を入れたような様相もあり（PL.４（３）など)、土器群Ｅ・Ｆ下には完形に近い土器もあるため、両方の可能性がある。ただし、完形の土器であれば中に何かをいれてお供えをするといった祭祀の様子が想定できるが、硯に関してはそういったことが想定できないため、①の可能性が最も高いのではないだろうか。

次に出土した石硯がたどった履歴に関して、諸先生方からご教示を受けた内容をまとめておく。まず製作地について述べる。微細な白雲母片を多量に含む砂質頁岩はあまり目にするものではないが、糸島

市の三雲遺跡で出土した石硯（武末・平尾2016）等の石材と共通する。よって、元々は中国で製作されたものが持ち込まれた可能性が高いと考えるが、古墳時代前期という時期を考えると初期の国産が存在していてもおかしくはない。

次に加工について述べる。側面１は擦り切り技法も用いて割った後、研磨されていないが、このような「割りっぱなし」の例は中国出土の石硯にも存在するとのことである。ただし、中国や韓国等で出土する完形の石硯を見ると、やや台形状になる長方形を呈するが、本調査区出土品は正方形に近い。もちろん、本品がそのままの形で硯として使用された可能性もあるが、何らかの再加工を行う途中である可能性も考えられる。その場合、もともと長方形であった硯を側面４あるいは側面１で擦り切り技法を用いて正方形に近い形にした可能性が高い。何に加工しようとしたかについては、正方形の形から、研石が候補となる。なお、Ｂ面の隅部にみられる窪みから、本品が元々大きな研石であり、それを半分にして硯とし、さらに半分にして小さな研石に再加工しようとした可能性もある。

中国で出土した硯をみてみると、厚さ0.8㎝以上の硯の出土例が増加するのは新代からである（吉田1993)。新・後漢代に属する厚さ0.8～1.0㎝の硯の法量が長さ10～18㎝・幅５～７㎝なのに対し、同様の厚さで晋代のものは15～32㎝、幅12～27㎝でやや大きいという違いがある。本調査区出土例は幅4.7㎝であるが、上記のように再加工された可能性がある。よって、後漢代の中国から持ち込まれて長く使われた後いらなくなって廃棄された、もしくは晋代の中国から持ち込まれたという両方の可能性があろう。

以上のように、今回出土した石硯には複雑な履歴があると考えられ、今後議論を要する。上記では様々な可能性を挙げたが、調査者個人の意見は以下のようである。各側面の調整の新旧関係や、Ａ面の縁部調整の新旧関係の観察から、側面１が最も新しい割れ面とみられる。元々が側面１側に伸びる長方形の硯であったならば、形が不自然であるため、元々は側面１側と側面４側にも伸びる大きな硯もしくは研石であった。よって、晋代にもちこまれたものである。また、擦り切りの溝が他の硯の類例よりも浅いことから、倭人が中国の擦り切り技法を真似して再加工しようとしたが、慣れていないために失敗してしまい、廃棄されたと考えたい。

いずれにせよ、本品が倭国における文字利用の広がりを考える上で重要な資料となることは間違いなく、今後の研究の進展が期待される。

石硯に関して、以下の方々にご教示をいただいた。記して感謝いたします（五十音順・順不同)。
足立達朗　安在晧　李健茂　板倉有大　久住猛雄　白井克也　高久健二　武末純一　鄭仁盛　常松幹雄
中村潤子　西谷正　平尾和久　平田定幸　古澤義久　宮本一夫　村上恭通　森貴教　森本幹彦　柳田康雄
また、管玉に関して谷澤亜里氏に、鉄鏃に関して三浦悠葵氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。

参考文献

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸＩＸ』
久住猛雄2017「福岡県（糸島・早良・福岡平野)」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会
武末純一・平尾和久2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢76』
柳田康雄・石橋新次2017「福岡県筑前町薬師ノ上遺跡の石硯」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』
吉田恵二1993「長方形板石硯考」『論苑　考古学』天山舎

（1） Ⅱ区全景（南東より）

（2） Ⅰ区全景（南東より）

（3） Ⅱ区SD03 完掘（南より）

（4） Ⅰ区SD03 完掘（南より）

（1）Ⅲ区全景（南東より）

（2）Ⅱ区北西壁土層

（3）Ⅰ区北西壁土層

（4）Ⅰ区SD03 土器出土状況（北より）

（5）SD03 土層（調査区北東壁）

（1）土器群Ｂ・Ｃ①

（2）土器群Ｂ・Ｃ②

（3）土器群Ｄ

（1）土器群Ｅ・Ｆ北側

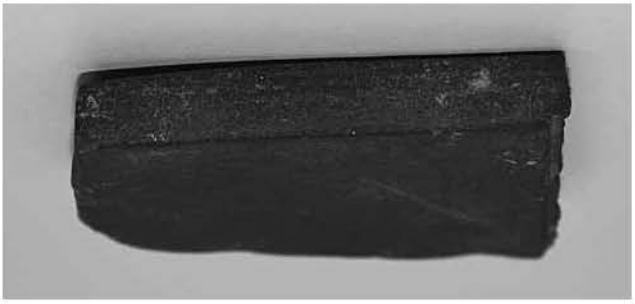
（2）土器群Ｆ南側・Ｇ

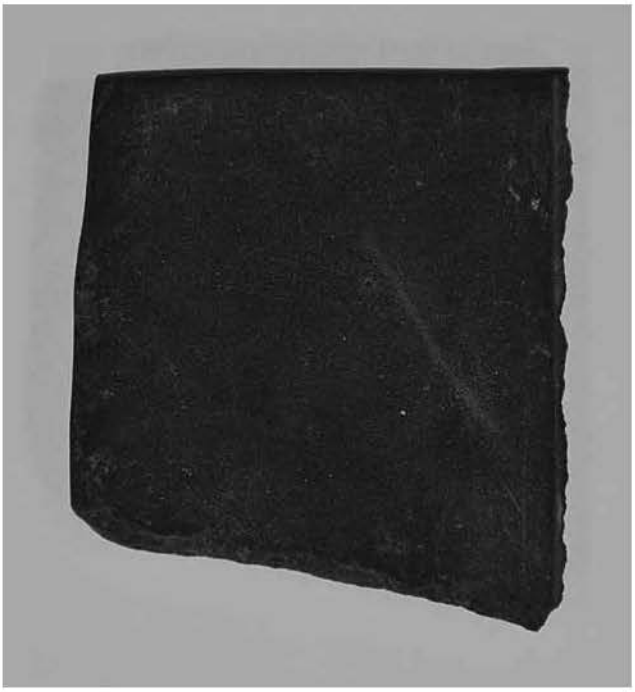
（3）土器群Ｇ　44・54

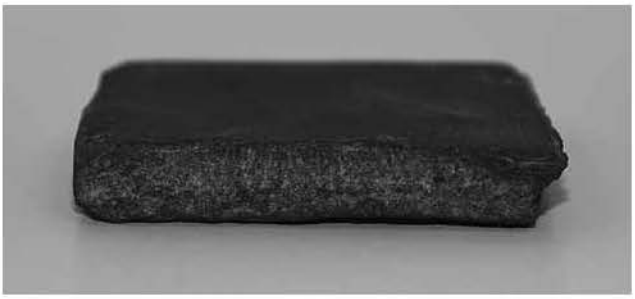
（1）土器群Ｇ　45

（2）土器群Ｈ・Ｉ

（3）SC66・67







石硯

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひえ
書名	比恵82
副書名	―比恵遺跡群第143次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1350集
編著者名	朝岡俊也
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2018年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
比恵遺跡（ひえいせき）	福岡県福岡市（ふくおかけんふくおかし） 博多区博多駅南（はかたくはかたえきみなみ） 4丁目120-2	40137	0127	33°34′44″	130°25′44″	20160704 ～ 20160803	65㎡	事務所兼倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡	集落	弥生/古墳	弥生－竪穴建物２＋土坑２＋柱穴/古墳－溝１	弥生－弥生土器＋石器/古墳－土師器＋石器＋金属器	

要　約

比恵遺跡は御笠川と那珂川の二つの二級河川に挟まれた洪積台地上にある。

本調査区では狭い面積の調査ながらパンケース30箱分の非常に多量の遺物が出土し、この地で密に生活が営まれていたとわかる。主な遺構は弥生時代中期の住居跡や柱穴、また弥生時代終末期～古墳前期の道路の側溝である。

道路側溝は幅が約１ｍで、深さは今回の調査で最も深いところで70㎝だったが、上部は後世の土地造成で削平を受けているため、本来は１ｍ以上の深さがあったと考えられる。西側に隣接する127次調査で西側の側溝が検出されており、今回検出されたのは東側側溝で、その間の道路幅は約６ｍ程と推測される。土層から、幾度も掘り直されたことがわかり、その度に多量の土器を溝の中に廃棄している。

また、道路側溝からは多数の土器に混じって石硯と考えられる石製品が出土した。この時期の資料と確実にわかる例としては国内初であり、倭国における文字利用の広がりを考える上で重要な資料である。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1350集

比恵82

― 比恵遺跡群第143次調査報告 ―

2018年（平成30年）３月26日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　新　交　社
福岡市中央区地行1丁目11-3